

雪女五枚羽子板

近松門左衛門作

樂車うて囃した樂車うつた見さいな藤内太郎。アリヤコリヤ。殿ハナ。笛吹のヤ。家で。紫竹寒竹。埃をさ。さつさと拂うて。通らいのく。お年玉は到來の。此方からも遣らいのと。合せ吹いたるはさつても吹いた笛吹と。どつと奪めて通した。門松立て、囃した御松囃を見さいな。藤内太郎。アリヤ。コリヤ。殿ハナ。斯波殿のヤ。御近習。弓矢打物。お馬をさ。さつさと乗初や。蓬萊のく。樞搗栗膝栗毛。鬨斗昆布に川原毛と。祝ひ乗つたるは。さつても伊達な地お侍とオロシどつと都に。褒めにける。地主君斯波の左衛門義將は。當家の管領たるに依つて藤内太郎が文武の器量。將軍義教公の上聞に達し。御直の諸武士同然に年頭五節の御目見え。殊更笛の達人にて小水龍とい

ふ名管を。上より預け下さる。そも此の笛は天曆の帝の御寶物。國に異みある時は吹かぬにおのれと音を出す神妙あり。御先祖尊氏將軍より代々に聞うる笛の音の。ひいや兵亂治りて寶祚百王の堅めたり。時は永享八年正月三日。將軍家の御松囃北山の御所にてあるべしと。藤内太郎は笛の役御預りの小水龍。餘寒の風に吹き反らし。未だ夜も深き五更の一點。フシ虎の。御門に着きにけり。地太郎袂箱に腰打掛け。御松囃は辰の刻との御觸なれば。役人伺候の諸大名夜の中より群參あるべきに。御所の内ひつそとして御門も未だ開かれず。地不思議さや退屈さ。奴に持せし烟管筒。一服ついて燻らす目覺草ははつとり(服部初鷄)の。八聲も鐘の霞み行くオトリ門のへ檜皮

を踏越ゆる。フシ霜の振袖。地角前髪取りかはす手もわなわなと。女が帯の若紫。茶字の袴の信夫摺。亂れ逢ひにし密通の。フシ駈落とこそ知られけれ。地咎めて無益見ぬ顔せんと。下人等にもさ。やきて築地の蔭に忍ぶとは。見すや知らすや門松を傳ひ下りたる人も木も。連理の女松男松かや太郎いよく身を隠すを。調彼の若者きつと見て。地打物抜いて弓手より聲もかけず打ちかくる。刀の柄にて拳を打ち太刀振落させ。二の拍子にて胸骨あて踏付くれば。女は又右の方より打ちかくる。拳を打たんと持つたる笛。振上ぐるを付入つて笛を二つに切折つたり。すは痴者と取つて引寄せ二人をどうど引敷いて。調アアこび過ぎたる奴等かな。斯波左衛門が家來藤内太郎家治ぞ知つたらん。おのれ等不義の駈落見通しにする處に。却つて手向ひ刺へ御預りの笛を切り。地言語道斷の始末白狀せば許すべし。偽らば繩をかけ四職衆の白洲に引居る。一家二門

の恥を見るかサア分別次第と申しける。朝は御松囃の御觸なるに。はや東雲に及べども。其の沙汰なきは様子あらん。御前向てム、さては御存じ候はぬか。地昨夕俄に變替り松囃は明日の晩。赤沼の方へ御成に節分のお年取。御遊覽とのお事にて皆々お觸が廻りしに。たとへお觸がないとても御前の事を知らぬとは。エイよい加減な事ばかり。朋輩の中川殿とこな様との挨拶が。大體並の事かいの奥の事は筒抜け飛脚よりましぢやもの。知らぬとは小面憎う、ッンぶちたいまでと笑ひける。阿ア、音高しく。さては赤沼奴が此の笛を過たせ。我々主従越度にせんとて御祝儀までを延引せし。地奈落まで大事を承る御厚恩には御身の上。奈落まにいらん爲。地召寄せ置きて候と。かねて仕度の色揃へ御侍女の其の中に。心意氣もあり正八幡ぞ偽りなし。なんと落してくれ別る、方の禮者の聲物孟春の御年玉。取り風俗もこれ當流のまん中川。酒になりてのまいかと、スエテ理非を決して語りける。阿かはしたる扇子箱日本目出たき年越や。今名人さ飲ますに人をお小夜の君。琴三味線ヲ、一色大炊之介殿承り及うだ。お身柄と日から一ツ年の數升に煎豆福は内。鬼は外の撥音は、ッン誰も袂に菅戸かや。ッンさて又申し御誓文虚言はあるまじさりながら。明らにふかみどり棧に。鬼も恐る、と。鯛の町には。姉が小路の針屋のぬひ。紺屋のお

染白粉屋の艶絲屋の房。舞子踊子小唄の

節。上手に座敷を持ちければなほ御機嫌は

義教公。烏帽子の紐も直垂も打ちつけ給ひ

膝枕。足さすられつ御腰を、フシうつゝとち

なき酒宴なり。地入道時分よしと思ひ。

さて節分の夜厄拂ひと申して。民間には行

はれ上つ方には御存じなし。御身の大事と

あるものを。捨つるといいて。某に預けら

れ。厄拂ひの詞をのべて呪へば。悪病邪氣

を除くと申す。疾く／＼行ひ奉らんとぞ申

しける。義教公倭臣の詞を誠と信じ給ひ。

幸ひ是に先祖よりの印判。軍兵を集め關所

廻船。日本を治むるも此の印一つ。地是を

暫し預くと錦の袋に入れながら。サア捨

てたと投げ給へばお厄は我等拾ひ除け。四

魔三障崇りはなしこれ女子ども。都の町の

厄拂ひ物は呪ひ出るまゝに。拂ひ申せと云

ひをぞまねびける。

初春厄拂ひ

やあら目出度や此方の御壽命申さば。鶴

は千年龜は萬年。浦島太郎が八千歳。東方

朔が九千歳。西王母が桃の核。フシ猿豆小

豆。視もまめどり雛鳥のオクリはがひ。重ね

に。寶は集る。家は治まる持丸長者の。四

方に四萬の藏の戸前の明け行く年から。フシ

福神達の御影向。一に市姫辨財天女。二は西

の宮若恵比壽殿三は三面大黒頭巾の壁の。

數々十二箇月は。無病息災其の身は蠅槌打

出の小槌。打つて打出す金錢。銀錢。福德

圓滿惡魔外道。打拂うて西の海へさらりさ

らりさつ／＼こきやこう。まつかう祝ひ

納むるは。フシこれ上方の厄拂ひ。扱また

東の果にては。斯くこそ厄を拂ひけれ。聞

お厄拂ひ／＼厄つ拂ひ申すべし。がいに

目出度い此方の御壽命語るべしなら。鶴と

龜奴が何うち食らつてすつ百萬年のめりめ

りとくたばり外れにあやかりなされ。父ら

きだし耳朶でつかく。五百八十七曲り惡魔

外道ぶつ拂つて。西の海へ。地ふんなける。フシ

こつきやつこうと祝ふとかや。地爰に名に

立つ色廂。揚屋女郎の厄拂ひ。スエテ又珍ら

かにかくもなん。あら／＼目出度やこなさ

んの。御壽命申さば苦海十年。蠅が止つて

鶴は千年。龜は萬年オクリ浦島。太郎が重箱

肴救日々は一歳に。フシ貸す數の子も。御

盛や何時大福の。茶はひかず。揚屋に海參

煎藏鮑辯間相客。宿屋駕昇のつけとゞけ。

こそ／＼宿の。フシなさけ事。身揚り分のお

どもりも。東方朔が九千兩それ下残らず梅

法師。井戸へ釣られた大黒天も。好い客踏

まへた俵子や。蜜柑柑子大々盡子の日の。松

や根引のよねん。三年前の紙纏頭空纏頭捨

てた。ふるがけ今年はくる／＼廓の全盛。

炬燵に火をせい床せい酌せい。酒はこぼす

と仕着は厭はじ。禿が文錢駒は古さに。寶

く。揚屋々々の賑ひはオクリ二階。中の間奥座敷。五客。六客。つきやく入れず。リシ扱こそ不審春の日の。長う要らぬは。地見せかけ大盡悪識未社の。ちよつと借着に食物吸物小言いふ人おやぢの意見に手代の始末。一つ買うては三度借る客是が廊での悪魔外道。打拂うて西の海へざらり。く

御預りかと思ひしに戻さず其處に留置いて。地さすが女の一筋にア、忝き御知らせ。夫のなんとやらひそくと妾はどつとものみこなされた此の中川。サア其の御判を戻さうか戻さぬか。戻しやらねば思案があるとッ。男勝りの氣色なり。地入道動ぜぬ顔つきにて。好い處へ來召された是こそ仔細あれ。斯波左衛門義將諫言申すが御氣に入らず。密かに諸國の軍兵を集め左衛門滅す御催。それを聞いて笑止さに。御判をさへ取つたれば。軍兵一騎寄せる事もかなはぬゆゑ。やうく賺し取つたる御判。聞けばそなたは斯波が家來。藤内太郎家治と夫婦の契約して居るけな。是に就いて大事がある。藤内太郎は御預りの笛を折る。それを越度の仰せにて。今宵はへ召寄せてお手討になさるゝ筈。地今宵さへ過しなば明日は某御訴訟申し。藤内は助くべし。どうぞお側の方物ども盗む事はなるまいが。如何にまじく。地ふけにけり時分は好しと中川義教今御判はお厄落しの呪ひに。ちつとの間して笑止など。フシ誠しやかに云ひければ。公の枕の太刀。奪ひ取りて出でけるが思へ

女に誘なはれオクリ寢殿へ深く入り給ふ。フシ入道親子。地見送りサア熊橋してやつた。いかに厄を拂ふとて。天下を治むる此の印判。人手に渡すうつそり滅すに思案は入らず。地むつかしいは斯波細川。此の判を以て義教の下知と偽り。鎌倉勢を催し一戦に討取るべし。地此の年越からまんが直つたこれ熊橋。來年は。めつきりとよい年取らせう精出せと。うなづき悦ぶ折節御侍女の中川。つかくと走り出でこれ赤沼殿。四只今御判はお厄落しの呪ひに。ちつとの間して笑止など。フシ誠しやかに云ひければ。公の枕の太刀。奪ひ取りて出でけるが思へ

ば品こそ替つたれ。慾心ならで此の太刀も
主の目抜の盗み物。生きる死ぬるの切迫ぞ
と心も後れ手も顛ひ。持ちたる太刀の柄鮫
や鱈に追はるゝ心地して。フシ繪書院に出
でにけり。遺戸をそろりと明けければ吹雪
と跡の恐ろしさ。凍む心の駒下駄に怪しめ
らるな。エ、まゝよと。素足の雪に飛下るれ
ば。フシ劔を踏むが如くなり。地跡より赤沼
つけ來り遺戸に銚を下せども。中川それと
ねは扱は未だ早かりつと。暫し待つ間の
かきたれて。オ、コゝほすが、如く降る雪の
フシ庭も埋れて。白妙に立寄る。櫓も横吹雪、
フシ袖打拂ふ蔭もなし。地佐野のわたりもさ
のみやは嵐は五體をつんざけり。袂は捲い
て防けども襟にたまりし雪解けて。膚は水
に浸さるゝ足は膝まで埋もるゝ。鬢の水柱
ほ白銀のステテ瑤瑤かけし如くなり。ア、寒
や苦しやと顛ひ上りて齒も合はず。通路な
らで是も又男の爲ぢや戀ぢやもの。此處

を一つ耐えうと身を抱締むれば息切るゝ雪
にて口を濕せば。身の内までもしみ凍り寒
苦鳥の苦しみや。立歸つて湯一つと腰ま
で埋む大雪を押分け踏分け遺戸にすがり。
押せども引けども。明かばこそ南無三寶。
誰かは銚をおろせしと立歸れども時の間に。
分來しあとを降埋み波路を凌ぐ其の風情。
土戸は猶も明かばこそ。次第々に降り重
なり。身も埋もるゝ其の苦しさエ、扱は
誰られたか口惜しや。病に臥し及に伏し火
水に死するはある憤ひ。殺しやうもあるべ
きに雪に凍やし殺さんとは。おのれ入道奴
なざくとは死ぬまいと。埋るゝ雪を這ひ
出づれば踏み沈み。這上り踏落し嵐は咽に
吹きせまり。呼ばはる聲も立たばこそ手足
も凍え身も冷え渡り。寒やつめたや苦しや
なう藤内殿く我が夫なうま一度逢うて死
にたいぞと。雪に喰ひ付き涙の水。ステテ眼
も口も閉ぢられて。地天ぎる雪はばうく
ばう。寒風頻りにさつくと。五臟六

腑に刺す如く息の保ちもあらばこそ。二十
歳の春の花待ちあへぬ。雪に先立ち消えけ
るは。敢なき最期や。三三〇一七。東南に雲
起つて。西北に風靜ならず夕闇の。空もと
よろく雪も夜のあら。地物凄の。フシ景色やな。
地斯波左衛門義將は今宵しも。小水龍のおの
れと音を出す不思議さよ。君の御事氣遣は
しと人馬も具せず藤内一人提灯ともさせ。
雪踏分けて赤沼が。フシ門の此方へ着きける
が。地俄に持たせし提灯の吹き消す様に消
えてけり。塀の内より白鷺の飛ぶ如く。雪
渦巻いて提灯に映ると等しく女の姿。白衣
白髪白妙の。フシ雪女とも謂つべし。地左衛
門主従太刀の柄に手をかくれば。なう見忘
れ給ふか藤内殿。互に忍びて落合の漏らさ
ぬ水は御身と我。思ひ二つの中川が。幽靈
是まで。フシ來りたり。地口惜しや赤沼親子逆
心にて。君の御判を奪取り。自らには御太
刀を奪はせ左衛門様我が夫にも。其の科負
せて失はん。ステテ巧と。知らで盗み出づる。

道の前後錠卸し。今宵の雪に埋れて凍やかかと。赤沼親子犬二郎心得たりと出でけるが。中を引渡し。なんでも柱一本の主にしてくし殺されし。此の世から八寒の苦患は。我々が五常の徳備り。威あつて猛からぬ。れんもの。さりながら春の夢は合はぬもの。が身一つにて。いとし可愛の我が夫主従の忠臣の威光に氣を吞まれヤア斯波殿。奇特必ずお氣にかけられなと。フシかんらからと御命。助けたや救ひたやと。思ふ一念凍りの御出と。フシ手を揉んでこそ居たりけれ。ぞ笑はる。赤沼も云ひ込められじといやつき只今知らせ申すぞとよ。此の御太刀を地大將斯波と聞き給ひ。ねほれ髪に烏帽子これ義將。興和殿が今の言分は。其の身の義教公へ差上げ。御身の言ひ譯立て給へ名引きかけ出で給ふ。左衛門につこと笑ひ。過り人に云はせぬ前置に。かさから出づる残り惜しの我が夫や。此の世の縁の薄雪も義將は今宵珍しき夢を見。御物語のため伺詞なりと此の入道は聞き申した。ヲ、思付ながき契りは厚氷。結び添へく生々世々候仕る。いやはや夢はをかしいもの。これいたりお預りの小水龍の笛を打折り。御咎によも解けじ。さらばくと泣く涙のフシ赤沼殿御氣にばしかけれな。貴殿逆心のめを恐る。由地それ程の事は某が。申譯を雲と消えて失せにけり。地藤内涙を押拭ひ企にて。尊氏公より御相傳の御印判を賺ししてやらんエ、氣の狭い左程の事。氣苦勞おのれ入道奴。妻の敵國家の仇首引抜いて取り。御侍女の中川をだまし御太刀を奪はに召さる。な。フシ左衛門殿とぞ申しける。くれんすと。跳り入るをやれ待て是は一應せ。罪を某に負ほせて此の左衛門に。切腹地藤内太郎飛んで出で居丈高になつて。こならず。申しても天下の大事大將の御座とさせんす謀とまざくと見たる夢。覺むるれ入道。兩刃の劔にて人を切るに。振上いひ。御直衆に慮外せしといはれては理非とひとしく枕元此の御太刀のあつたるは。けざまに我先つ切らる。といふ響あり。ま立たす。是に控へて窺ふべし罷出では勘當なんと正夢とは思さぬか。地夢なればこそつ其の如く人を惡に落さんとて身の惡を嘯ぞと。有め給へば藤内太郎。フシあつと静め御仕合もし誠にてあるならば。赤沼殿でもるか。其の御笛は此の藤内太郎家治が預りて控へたり。地其の身は衣紋引繕ひ御太刀。青沼殿でも御前にて直中を。親子繋ぎに突奉り。先日北山の御門にて一色大炊之介を。持つてしづくと。廣間に立つて。興お小。抜くか又一戦に及ぶとも。和主如きの相手汝が頼んで切らせたを忘れたか。功ある者姓衆く。斯波の左衛門義將御機嫌伺ひ申に騎馬を向けるまでもなし。左衛門が足輕の心掛誠の小水龍は。庫に藏め影を作りてすと。高々と宣へば。地すは左衛門よ討取れ。十騎ばかり差向けば。朝がけに生捕つて洛持つたる故。うぬが頼んで切らせたは。其

の影の笛なりしはうつけ者、誠の小水龍と敷。己れ一人智慧ありけに愚將とは誰が事
いふ御笛。天曆の帝勅筆の銘ありて。天ぞ。罷立つて閉門せよと大きに怒つて仰せ
下の大事におのれと鳴る。只今も音を出しは我が君の事よ。愚將と申すが御耳に障る
怪しさに馳せ参す。是を見よと差出し是は我が君の事よ。愚將と申すが御耳に障る
程大事の御寶を。何として御邊は大炊之介程ならば。など佞臣忠臣の詞を聞分け給は
を頼んで切折れとは云ひしぞ。笛を切るがぬあましましよ愚さよ。地御祖父義詮將軍
好きならば汝が咽吹切折らん。つめかく御父鹿苑院殿義滿公。御舍兄勝定院殿義
れば義將ヤア藤内御前といひ。主を差措持公。御先代義量公我が君迄は五代。我々
き憚り千萬罷退去れ推参者。赤沼入道ともは三代管領職を承つて終に閉門の例候は
あらん人が笛を切折り。遺恨を晴らすなどす。左程過ある左衛門ならば閉門までも
といふ若輩所爲のあるべきか。よしそれはなく。御指料を以て御手討になさるゝか。
あるにもせよ上は天下の武將たり。御譜代但し御氣に入りの赤沼入道子息新判官。此
忠功の斯波の武衛笛一本に思召し地代へらの歴々に討手を仰せ付けられ軍勢を以て。
れんや。爾とは思へども忠臣を厭ひ佞臣に此の左衛門をなど攻滅し給はぬぞや。佞
心をゆるし。酒宴妓樂に御目眩み。枕許のヲ、赤沼なんどの手に及ばぬはことわりこ
太刀取らるゝ程の大愚將。山鷄を鳳凰としとわり。軍といふは酒宴遊興に事かはり命
燕石を玉と見て。國を失ひ身を破り名を末つこのものなれば。鯨波の聲矢叫びに怖れ
代に損ひ給はん。地口惜しの御所存やと。て馬より落ちて目を眩さんより。追従い
拳を握り席を打ち涙を流して教訓ある。て世を渡るが一段の思案ならん。エ、これ
大將御氣色變つて。折こそあれ祝儀の座我が君。莫耶を鈍しとし鉛刀を鋭しといひ。
周の鼎を棄て、瓢箪を。寶とするといひしは御身の上と御存じなきか。麒麟も繫がれ
て動かねば犬猫に同じ。渴しても盗泉の水を飲まずとは義者の恥づる處。章甫の冠を
沓に履かれんより。首陽山に蕨餅を練り泊羅に沈んで。江魚の腹中に葬られんには如
かじ。地某都を開きなば赤松細川畠山。結城長沼仁木石堂。大内今川山名京極宇都宮。
凡そ名ある諸大名頼もしけなき世を憤ほり。面々分國に引籠らば民百姓は貢物を私し。
地頭郡司に收歛あつて國を恵む糧盡きん。時には四海野心を含み。四夷八蠻一度に起
つて攻來らんは必定。其の時には御寵愛の佞臣奸人味方をすて、敵に下り。君一人敵
の擒となり給ひ。元祖尊氏公の御勳功も一度に朽ち。御父義滿公の七寶八貨に金銀を
鑲め。造り給ひし北山の金閣室町殿の花の殿三條の紅葉の殿。野原となつて梟松柱
の枝に啼き。狐蘭菊に隠れ栖んで。御山彦な
らで。誰か昔を訪ふ人の候ふべき。其の

時には此の斯波が詞を思召し出され。天を願もせず立退きしは。臣下の龜鑑弓取の鑑を云うて死ねとぞ申さる。左衛門打笑み望み地に爪立て。臍を嚙んで悔み給はん事と。こそは三重見えにけれ。フシ斯波左衛門。地義將は腹巻に小具足固め。侍には事を能く問うたり然らば其方にも不審あり。掌をさすが如し。三度諫めて用ひざれば。身を報じて去るといへり。左衛門が一生藤内太郎家治。若黨少々旗指一騎相具して。人の諫言も是迄なり。仲尼は欬水を受けて衛都を隔つる山崎や。フシ關戸の院にご着きにける。地か、つし處へ緋緘の鎧月毛の馬に乗つたる武者。直兎五十騎ばかり引牽し。地赤沼判官突立つてこりや左衛門。主君に暇やあ、左衛門。御暇申し捨て京都を開く慮外者。討取つて參るべしと大將軍義教ヲ尤の疑ひ某が心はな。管領の其の中にも出す推參者餘さじと飛んでかゝる。藤内太郎斷隔たりヤア。汝如きの鑄刀が主人の身に立つべきか。地ま一度身悶えするならば引返せとぞ呼ばはりける。左衛門聞きもあ御前とは云はせぬと。はつたと脱めば義教へすなに勝秀とや。たとへ千萬騎向ふとも。も朋友の交を違へじと山名に討手とありけ公やれ待て赤沼討手を以て。左衛門が首を打物の續かん程攻戦はんと思ひしが。勝秀るを。請受けて某が向うたる討手なれば。取る鎖まれ、と御詫ある。左衛門少しもと聞くからは速かに腹切らん。首取つて歸むさと腹は切らせぬぞサア。御邊の心底承臆せず討手とは有難し。地速かに腹切つてれとてどうと座を組み居たりける。勝秀馬らんとありければ。ム、聞えたりさぞあら汚れ首を差上ぐべし。地さりながら討手のより飛んで下りやれ待て左衛門。和殿が切ん此の左衛門も其の通り。勝秀は愚か樊噲人は誰ならん。其の相手によつて一戦の勝腹に三箇條の不審あり。勝秀が武勇に恐れが討手なりとて。恐しとも思はず諫言申す負を決し。討手の首を此方へ拜領致し候べの切腹か是一つ日來水魚の朋輩の。討手も君の御爲。死せる孔明生ける仲達を走らし。慮外と思召されぬ爲御断り申し置く。に向ふ恨みの腹か是二つ。まつた浮世を輕しむといへり。死しても忠は忘れまじ。一藤内太郎供をせいと御前を立つて悠々と。く見て身を見限つて切る腹か。三つに一つ且都を立去り。御邊とも内通し悪人を退け。

我が君を名將と仰がんと思ひし處に。案に違ひ御分討手とあるからは。浮世の望みも切れ果てゝさて生害に及ぶなり。弓矢取る身の討手を蒙り手を空しうは歸られまじ。介錯せよ勝秀と自害せんとする所を。待てく左衛門けに満足せりく。日頃語る朋輩のかほどに心の合ふものか。爰は死する處でなし筑紫方へも身を忍べ。我も本國に引籠り世上の安否を内通し。佞臣の榮枯を窺ひ義兵を起し討つて出で。惡人を攻滅し聖賢に勝る名將と。なさんとは思はずやと理を盡し諫むれば。左衛門横手を打つてハア、左様ぢや過つた君の御爲大事の命爰は死ぬる處でなし。一先づ落ちん御身も退くか。なかくの事やれ勝秀。斯程に揃ひし忠臣に君君たらば唐土も。靡け從へ治めんものを無念にないか勝秀。口惜しいわ左衛門と互に鎧の袖と袖。取付きすがり泣き居たる。フシ忠義の涙ぞ哀れるヤア。刻うつして益もなし朋輩の縁つきす。また

中之巻

逢ふ事は命次第と泣くく左右へ別れしが。又立歸つてこれく思へば。まだ對面せずこれ當年の逢初め。さればく其の通り先づ新春の御吉慶。此方も其方も互に目出度い御越年。此の春よりの御悦び十分の御仕合珍重。珍重。お盃は永日々々。然らば春永末永月永日永年も壽命もながくと。傳はる御代の時に逢ふ春の。門出を祝ひける。

つたるは扱ても打つた大鼓とどつと褒めて通した。春めく大路ぞ。豊かなる。六法ヨイ。一夜押開けて四方の春。空のかんばせにこやかふくやかにつこりほやりの笑顔は誰だア。それだか是だか春の司の佐保姫君。霞の衣當流仕立。しやんと着こなす四尺八寸。あざを握つて押せく。押込め乗込め米俵。でつかく踏まへた大黒々々。大黒舞と囃されて。天の戸袋だんぶくろ。くわつと開けた初日の色あら。面白やお目出度や。草木心なしとは申せども花實の時を違へず。けに陽春の徳利爛燗屠蘇の酒。三杯機嫌の朝ほらけ物もう。どれい。先づ當年の御吉けいはく慶庵。めつくり今年は若うなるく。なるほどく目出度い事の言ひくさ山草。穂長は白妙標の淺みどり。わつさりわさく紙衣の袖にも春立つと。いふばかりにて金かけて。買った袴の師走の氷。叩いて砕いて若水の湯殿初め着衣初め。衣紋繕ふ若い者藤内二郎。同じく三郎。合せて五郎

は曾我に劣らぬ住家にも。ごまめ鱈の素浪人。雞糞の上置輪ん切大根すんでん。どうど打ちをさまつた。時世に逢ふも他生の御縁花の宴。椽から落ちたお乳の人。打つた處がふくく福徳。千歳を呼ばふ鶴の聲。此方は似合つて雀はちうく鳥はかあく。たる玄關前。これは本阿彌の屋造と。ステテ鷹とろゝ山の諸。精のついたる妻戀猫。猫の化粧。鼠の嫁入。ち、つちつくり色をやる。戀から生れた人間萬事塞翁が。馬のうつた太鼓の撥。狸がうつた腹鼓うつたら鳴るべい。何になるべい。知行になるべい。なれくなれく。花になれくし王城の町。其方に高山去年の雪。これ。香爐峰の心なんめり。簾を捲けばお肴に嵐が雪を。もつて北山東山。西に妓里戀廊。正月買の初君の袖を連ねる裳裾をつらぬる。ぬるくぬつと出る日影に。南枝花始めて開く。梅に驚。紅葉に鹿。獅子に牡丹。昆布に山椒。小粒な男も陽氣を受けて。和歌を轉る一曲奏づる。つるくつるく。釣つた處を惠

方棚賑ひ申す榮え申す。押へ申す食べ申す。色めき申す時めき申す。御亭を祝つて御禮の。フシ春ぞ長閑なる。ハルハシ折知り顔に。白梅の。地路次の垣ほに咲きこほれ。研ぎ拭ひたる玄關前。これは本阿彌の屋造と。ステテ鷹とろゝ山の諸。精のついたる妻戀猫。猫の化粧。鼠の嫁入。ち、つちつくり色をやる。戀から生れた人間萬事塞翁が。馬のうつた太鼓の撥。狸がうつた腹鼓うつたら鳴るべい。何になるべい。知行になるべい。なれくなれく。花になれくし王城の町。其方に高山去年の雪。これ。香爐峰の心なんめり。簾を捲けばお肴に嵐が雪を。もつて北山東山。西に妓里戀廊。正月買の初君の袖を連ねる裳裾をつらぬる。ぬるくぬつと出る日影に。南枝花始めて開く。梅に驚。紅葉に鹿。獅子に牡丹。昆布に山椒。小粒な男も陽氣を受けて。和歌を轉る一曲奏づる。つるくつるく。釣つた處を惠

思へども。双物とては脇指一本ちぎれ具足の一領も。才覺とて叶はず如何せんと思ふ處に。これ女房は持つべきもの。黄金三千兩調へてくれうといふ。地此の金子では御邊と我が軍用意は物の見事。斯波殿の御手に屬し藤内太郎二郎三郎と名乗つて。赤沼親子が首提げ。めざまし功名御感狀を拜受し。今の泣事止めうぞやと。語れども三郎は。ちつとも乗らぬ顔色にて。主早魁はいかず。斯波に扶持を受けんとは勿體なし。いつぞや兄太郎殿の肝煎にて某奉公望みしに。氣に入らぬとてありつかず。斯波に嫌はれ無念の折節。赤沼入道幸滿殿へ肝煎らんといふ人あれども。拵へに資本なく延引に及ぶ中。犬二郎滿景より斯波の左衛門は勿論。宗徒の郎黨一人にても討來らば三千石は相違なしと是。地慥な書中到來す。御内方の調へ給ふ金子少々配分あれ。身の廻り大小拵へ。斯波が面打ち赤沼殿に奉公し。三千石では仕好い事二人扶持や三

人扶持の御合力。兄貴そこらは、フシ引きませぬとぞ廣言す。地 二郎むつと空笑ひ。見なればこそ二人扶持の合力とは先づ過分さりながら。二人の兄が主と頼まん斯波殿の大敵。赤沼に従ふ其の方に此の大切な金子與へて。敵に勢付けうとは云ひ難し。地 天下の忠臣賢臣と呼ばる、斯波殿に。嫌はるゝを口惜しと思ひ手を下けかせいで奉公し。斯波殿にも懸慕はれんと思ふ心はなく。末頼みなき佞臣の赤沼を主に取らんとは。道に背く無分別追付け獄門の。相伴せんずる瑞相エ、笑止なと教訓ある。氣短き三郎ぐつと急ぎ春早々から獄門の相伴とは兄ぢや人嬉しう御座る。此の三郎が相伴するか賢臣の斯波の左衛門を。木上りさするか今御覽ぜと云ひ返す。ム、扱は斯波殿につく我々なれば。太郎殿も此の二人をも討つべきな。ヲ、まさかの時は此の三郎も弟とて容赦はあるまい。地 すれば組んで落ちる一戦に及ぶ時。貴殿の首は某が討取り。兄

がひには獄門の木を太うして。外よりは五六寸も高う上げてやらんといふ。個 二郎二三迄未だ君知らず。十五六からぬれ驚の。腹にするかねうぬが知行になる某が首。戰場までもなし今でも取られれば取つて見よと。脇差に手をかくるイヤ此の三郎が取り兼うか。サア討てサア来いと。地 柄に手をかけ睨み合ふ目の鞘はづしの下。身は竹刀抜きかねて、フシ暫し挑み合ひけるが。地 三郎飛びしさつてこれ二郎。個 好い加減に引きもせず。我等が大小本身でなしと侮るか。地 組伏せて赤沼殿へ引いて行くも合點なれど。兄弟のよしみ許し置く追付け大小調べて。真劍の勝負せん待つて居れ盛治と。上は立派な鞘口に。篋を遣うて別れける。フシ心の内こそ不覺なれ。地 二郎見送り弟と思ひ甘やかす。情が却つて倨傲になりけるよと。呆れて立ちし垣越しに。オクリとり、響く羽子。坂の音は娘の集りや。笑ひに春の色こもる。オクリ祝儀も。籠る伊達籠る情も何も鳴の羽根。スエテ雉子の風切思ひ羽

や。思ひの数を歌一と二た三い四う。地 羽根の數々年の數、フシ讀む聲聞けば姿まで。景色なり。地 藤内二郎も曲者にて扱も間舞うて戻る萬歳殿。鼓を少しかしこへ寄つて見物せよ。面白い事して聞かせうと戀も鳴手の曲。垣の内には本阿彌の一人娘の玉椿。侍女までが拍子利き鼓に合せてつく羽根の。打合せたる如くにて。三往來も留まる。ばかりなり。フシしづ心なき。地 春風の羽根を吹上げ横ぎつて。藤内が襟袖にばらりと。落ちとまる。二郎袂に拾ひ入れ鼓を渡し萬歳に。フシ目禮してぞ返しける。羽子板もつて玉椿侍女諸共走り出で。藤内には氣も付かず其處か此處かと梅の枝。搖りつ振ひつ尋ねける。藤内羽根を取出し、扇を擡けて二三四といふ聲に。昼返りアレ彼のお人の拾うてぢや。意地の悪いこ

れ此方へ下さんせとありければ。藤内眞が。いかい嘘をいはしやんす羽根つく事も
顔になりどなたの羽根か存せねども。年の上手なり。嘘つく事も上手なり抱付く事も
数つけば夏瘦もせず蚊が喰はぬと申す故。上手である。此の抱付の上手奴に。フシ抱

ちつとの間かりまする女中の大事の物。長かかれて見たいと抱付けば。さすがの藤内し
うつきは致しませぬ。早うついでにのけませよけになり。扇の骨で白壁に。フシ小坊主書
う。一二三四五六七八九と口ばやに数ふれいてぞ居たりける。侍女ども取付いて扱も

路次の取りつきの桁様の。障子を明けて床
の間の床に置かれし一腰の。よき折紙に相
州物の中に取つても出来心。盗といへば氣
も後れ前後棒鞘身は顔ひ。足もしどろに取
つて出で。フシ行方知らずなりにけり。地暫

ば。玉椿打笑ひお年は其の様に往きそむ
ないが。地数はたんを取らしやんす。ほん
くにおいくつが定ぢやまでと手を取れば。調何と此の家に將軍より御預の銘の物。数

手を取つて引きければ藤内是ぞ幸ひと思ひ。
小氣な往來も見る。門の内へちと御入りと
穿鑿する處へ路次より歸る盛治を。門外ま
で附出して盗人知れたと押取りまく。調二

くあつて家内には折紙道具失せたりと。家來
は面々身開きに上下騒いで共吟味。出入を
穿鑿する處へ路次より歸る盛治を。門外ま
で附出して盗人知れたと押取りまく。調二

調ホ、ウお家程ありてよい目利。我等はち
やうど疵なしに二十六。地羽根はとうにつ
き仕舞ひは又女どもが。名代につく羽根

事はあると承る武士たる者の冥加の爲。戴く
多あると承る武士たる者の冥加の爲。戴く
多あると承る武士たる者の冥加の爲。戴く

治の邊に居住の浪人用事あつて出京し。女
中方の誘引にて御太刀頂戴いたせし分。地

なるがなう此の女が私に。六十二の老女房
當年八十八歳。顔の皺は漣や志賀の山越

鏡開きにて奥の座敷に飾られたり。玄關か
え頭は等。それでも八十八ちやとて我が手
らは人目ありそれ路次口の錠明きや。沙

胡亂ならば女中衆へ尋ねられよと斷れども。
ぬかす程強盜且那の留主を狙ひ女子子供
をたらし。手の好い盗人打てよ括れといふ

に米とやられます。此のよねの八十八一日、
はつかれまい。数取りばかりで仕舞ひま

にけり。藤内三郎武治は兄が歸るを待伏
しよ。調十二三三十四五十六七十八
十。五六七八九。フシ草臥やといひければ。

橋にて。調棒鞘の刀持つて走つて下へさが
つたといふ。扱こそはや同類に渡したな。

十。五六七八九。フシ草臥やといひければ。
姫は羽根をひつたりお内儀様はあるまい

奥の路次口細目に明く。何かは知らず入つて
見て吐られたら出る分と。獨語して身を細

意地張らばぶち殺すと捻伏せて大小取り。

闘いやはや見掛ばかりの金拵へ。焼付で火傷すなど、雑言だら／＼脇差抜けば。あら身の疵物こりや／＼刀の身を見よ竹の筧。

くば料簡あれ。某身上稼ぎの爲妻の女房。今明日に金子三十兩借調へると申したり。刀の折紙いかほどか知らねども。盗人の實

あはれ。やさしき貞女なり。地中立の老女。供の男に財布を持たせ。今日御契約の日限ゆる。金子も渡し手形をも。地極めせんと腰掛ける。小晒悦び何故に遅いと。心待ち致せしに先づ此方へと請し入れ。調て連

きに借らうものと、フシ一度にとぞ笑ひける。地藤内涙にせきくれて盗人とは無實の難。天道も晴らし給ふべし武士の刀に竹

否立つまでは右の金子を渡し置かん。逃失せる身にもあらず土地で人にも知られたり。地繩を免して此の料簡頼み入るとぞ申しける。調家の首名文平次ム、聞えた／＼好い

合には大名方の若君の。おさし奉公といひ聞かせ夫の判も預りしが。調世間へも其の通りに言うて下されなば。茶屋廊の外は何なりとも嫌はねども。先のお主の名を聞いて手形も仕度いとありければ。調小聲にな

の筧。こそけても此の恥を雪ぐ事のあるべきか。舌食切つても死にたしと我が身をつかみ腕に嚙付き。大地を踏付け齒をたつき

留守に失うては此の文平次が譯立たず。三十兩あるに極まらば五兩は某償ふべし。地宿へ送れ取逃すなど。兩人兩手を引張れば一人は髻を取り。四方を棒にて取圍みサ

つて勿體ないお山や女郎にやるものか。地先のお主はさる御本寺の大きの。悟開いた長老様。寢酒のお伽にそれ様を三年限つて置きたいとの御事。此方から沙汰がしたう

言譯なし。さりながら一門兄弟歴々。主も思ひ定め。調これなう心あらん人は聞いてたべ。毛頭覺えなければ折悪るければ

許してたも頼むぞと。泣叫べども聞き入れず先を拂つて途すがら。面も恥も名も晒の字治の。里へと三重へ送り行く。フシ世も

の仕着に遣ひ金。未來も悪うはあるまいぞいのサア金渡さう判なされと。フシ手形と共に出しける。女房はつと涙ぐみ如何に夫の爲なるとして。出家に思はれ來世まで取り外

ては一家の破滅又後日に盗人あらはれなば。此の案内主人下人何十人あるかは知らず。犬糞に至るまで。生けて置ぬが合點なら

月の影さへ盛治が。妻の女房小晒は。スエ

さん悲しやと。そらに涙はすすめども差

ば兎も角も。されどもそれも無益の事願は

テ夫の出世の物入に。我が身を捨つる志

フシ

當つて變改も。泣く／＼判を捺しければ價
の金を讀み渡し。只今迎ひを連れ參らん御
亭様とも暇乞ひ。門出祝うて待ち給へとッ
ンと。金子を大地へばらりと捨て杖も棒も
しいそがしけにぞ出でにける。地かゝる處
へ藤内二郎大勢が取巻いて。逃げだてした
ら撲据ゑる撲殺せとどよめけば。同逃けは
せぬ棒あてな。地逃けたら撲つぞ棒あつる
な逃けはせぬと。命から／＼來る體女房き
つと見嗜みの。手鑓提げ突つと出で仔細
は知らねど我が夫。其處放せ放さずば片端
に突止めんと。突出す鑓を桿棒にて。打つ
つ拂うつ叩き合ひ。既に危く見えたりけり
盛治聲をかけ。同やれ女房はやまるな此の
人々にも一理あり。様子を聞くと制すれば
小晒は齒がみをなし。エ、腑がひなや理に
もせよ非にもせよ。浪人なれども藤内二郎
盛治といふ待ではないかいの。白晝に手籠
に逢ひ其の恥が立身の妨になりであるも
のか。夫を出世させん爲奉公に身を賣つて。

徒事になつたよな賤しき下々相手には不足
ながら。夫婦此處で討死し名を潔う残さ
んと。金子を大地へばらりと捨て杖も棒も
厭はゞこそ。無二無三に突立てしは、フシ人
の妻たる手本なり。地二郎手ごめを振解き
勇んで勵む女房が。鑓の柄をしつかと取り
ラ、健氣なり頼もし。同先づ靜まつて仔
細を聞け。さりと武運拙きは今日都本阿
彌にて。百貫の折紙道具盜まれし場へ行き
かゝり。我盜まぬに極れども言譯もなき首
尾となり。既に牢舎の縛繩かゝらんとせし
處に。地御身が情の三十兩ふつと思ひ出せ
し故。それを贖ふ約束にて口惜し乍らおめ
おめと。面を拭うて來つたり。御身が無念
の心底を。尤と思ひ遣る。我も生きんず覺
悟なかつしが。同下和が三度足切られ本意
を磨く夜光の珠。韓信は市に股を潜り。勾
踐は石癖を嘗めて會稽の恥を清めし例。地そ
れ程こそはあらずとも盜人の虚名を忍び。

目も恥を通れしも誰が情ぞや妻ながら。親
にも劣らぬ厚恩を生々世々に忘れはせじ。
思へば如何なる貧乏神よしなき處へ導きて。
思ひも寄らぬ難に遭ひ。情の妻の身の代を
無下になさうか口惜しや。あさましの運命
やとフシ男。泣きにぞ泣き居たる。女房はつ
と心くれ勇む心もよわ／＼と。さても／＼
先の見えぬは浮世ぞや。夫の爲に捨つる身
は何れも同じ道なれど。世を立て、所領の
主乗馬よ引馬よと綺羅をみがいて浪人の。

添うて間もなき女夫の中三年といふ年きつ
て。生別れする身の代を無實の難に換んと
は。口惜しや本意なやな金惜しとは思はね
ども。夫婦別るゝ三年の。月日が惜しいと
ばかりにてフシ聲も。惜まず泣き居たり。地
警固ども遅し／＼金子を渡せと聲々にいふ。
同ハテ渡す迄もなし其の金子。取つてうせ
うといひければ請取らいで置かうかと。小

繩
判吟味し數讀みてオクリ皆々へ京へぞ歸りけ

武功を立て、一天に名を立てべき念願。

地たつた今手形して三十兩取つたる金。皆

武功を立て、一天に名を立てべき念願。

繩判吟味し數讀みてオクリ皆々へ京へぞ歸りけ

武功を立て、一天に名を立てべき念願。

る。フシ盛治彼等を。地見送りてエ、心ない
雑人かな。盗まぬには極つたり此の歎き見
るからは。情も料簡もあるべき事此の上は
わやにする。取戻いてくれんずと駈出づる
を女房ハテよいわいの。金より命が大事な
り迎ひが来れば往かねばならず。三年の内
逢はれぬぞや死なうも生きようも知らぬも
の。迎の來ぬ間についちよつと門出祝うて
御座んせと。泣き腫れし目をにつこりと。
涙片手の暇を哀れ。わりなく三重別れ
行く。フシ跡は霞の。八重一重。山吹の瀬を
我が中の。天の川瀬と又何時か馴れにし夫
の盛治に。逢ふはたまさかたまくも。スエ
テ歩み習はぬ大和路や。涙に揉れ襦籠ゆり
て小オクリ類。重しと徒跣道の伽とや中立が。
フシ咄も今の氣に合はず。未だ春浅き御室山
花には雪を雇人が。戀知らぬやら荷も輕
き。肩荷の端に提烟草盆折々休む道草の。
今の悲しさ忘れ草思ひ。薰せ思ひ消し。胸
に解かせ手に掬ぶ。フシ玉水の。邊に着きに
けり。肝煎の老女聲づくり。これ申し御
内儀様。今宵は奈良に泊らせ明日はお國へ
着く。此處で月代刺らせ衣裳も替へて袴を
着せ。男の姿になします用意なされと申
しける。女房大きに仰天しそれは噴様何事
ぞ。寺方への奉公と聞くも腑に入らねども。
それは言うて返らぬ事月代を剃り袴を着て、
地男の眞似する約束は。こちやしませぬぞあ
んまりなと。フシ烟草を。吹いて顔をふる。
詞ハテ是こゝな人あんまりぎくくいはしや
るな。金遣つて手形は取るそれがいやなら
如何なりと。地三十兩の銀たて、爰から往
んで貰ひましょ。ヲ、なま暑いと上着脱ぎ
かけ。フシ汗押拭うて居たりけり。地女房し
くく泣き出し何事の報ぞや。奉公の身の
代が男の身にもつく事か。三年たつは夢の
中月代剃つた髪つきを。戻つて男に見せら
れうか人に面が合はされうか。道でさへか
かる事猶行く先が思はるゝと。泣けど悔め
どかひもなく思ひ。直すも亂るゝも心。フ
シ一つの涙なり歎きて。歸らず兎も角も。
地せめての事に様子を語り満足させてたべ
かしと。泣くくいへば肝煎悦び。詞チ
語らねば叶はぬ事。寺と申すは偽り心を鎮
め聞き給へ。此の國の大名古川權頭清氏殿
の一人姫。琵琶の君とて美人あり。斯波の
左衛門義將殿と嫁許。地されども父權頭殿
は赤沼入道幸福と。水入らずの伯父甥とて
斯波殿の御祝言。今に延びて沙汰もなしお
いとしや琵琶の君。二十歳の花も散り過ぎ
ても殿御の顔も見給はず。只斯波殿を戀ひ
慕ひ思ひ積つて氣病となり。今養生の眞最
中。詞それゆる器量のよい人を斯波の左衛
門義將と名付け。心に勇みをつけたらばお
のづと薬も廻らんと。醫者家の指圖なれど
も眞の男はならぬ故。男らしい女中のお尋
ねにてかくまで談合なりし事。地月代剃る
がいやならば。三十兩を今爰へ。フシ立て、
歸りやと語りける。女房あまり可笑くなり
寺よりそれはましならん。常々聞きし事も

あり左衛門様の眞似をして。合戦軍の咄でも見事には合はせうが。白らと姫君と肝心の夜討には。どうも勝負が付くまいとッシ笑うて憂さを晴しけり。地さては合點か悦ばしと荷物をほどき櫛道具。衣裳品々取出す女房常に連合の。髪月代は手馴れしが自剃自鬢の初元結。揉む黒髪を玉水の底の玉藻と水鏡。油の梅花剃刀も匂を惜しむ額際。剃れば芥の花蔓髪置きしての幾歳か。見馴れし顔に我と我が。別の涙みだれ髪オグリ共に、落来る膝の上。フシ小枕捨て。丈長も。捻元結に大髻眉の引黛男眉。鐵藥落す。ッシ磨き砂。磨き楊枝の。青柳に。地櫻咲いたる二役や。女とも見え男なら。御物上りの若者とフシ擬ふばかりになりにけり。地衣裳あらため太刀刀衣紋繕ひ待つ處に。引馬乗物徒士侍七ツ道具を押立て。古川榎頭清氏より。花掣新波の左衛門義將公の御迎と地呼ばはればアレ馬がでんく。つわいのア、怖やとぞ逃げにける。肝煎も

氣の毒さこれこれは何事ぞ。小訛りに訛つてどうすべいかうすべいと。男らしう遣らうぞやと囁けば打ち頷き。ムム、なんと身が方へ舅殿よりお迎ひだといふか。ヲ、大儀。目度い折からだ酒でも打飲つて。唐辛子をかつ嚙り。寒風を凌いで供をせろ。地先へ行くべい奴様のるさしやんせやと口掩ふ。袂張脰のしくと歩むとすれど。福の。身癖顔癖引包む殿御模様のかさね着の。うらなつかしき女肌男女の二面。此の手柏や此の手振れ。ふれくお前押立てる。まかせて置ける春の霜。古川館へ抱へ候。地かゝる處へ掣入する左衛門奴は。死に來る同然とッシ笑堂に入つてぞ笑ひける。地ヤアこれく下人どもには一味もある。父母聞かば事やかまし随分忍べ忍ばんと。座敷を立つて判官は。土民の家に宿を借りオグリ案内をこそ待ちにけれ。フシ殿御見んとて。琵琶の君。地今日にははらりと罷氣も軽く此の頃になき笑ひ顔。男といへる妙薬にッシ者婆も匙をや捨てけらし。父母

ばかり合點にて深く包む事なれば。兄藤冠者家來まで誠の斯波殿御出でと。伺候の侍頭を下け御通りと申し上ぐる。女心の男の眞似顔に紅葉の錦織。疊さはりも足浮きて舅君にも姑にも。どう挨拶を諸禮やら無禮やら。たゞあいぐと禮をして。フシ頭下けるに隙もなく。割膝いたく兎もすれば。女子居住居しどけなく。スエテ行儀つくるもいたぐし。姫君心わくせきと申し左衛門様。何がお氣に入らぬやら祝言のとりやりも。渡守なきこがれ船片破れ船の片思ひ。よう煩はして下さんしたと。フシうらめし。さうに宣へば。こがれ船でも何船でも手前帆船持合せず。本意を背く仕合と。フシ只禮。してぞ居たりける。藤冠者此の體を心得ずや思ひけん。これく左衛門殿。貴殿の御事は斯波の武衛のお館とて。系圖正しく是ある由。氏は何氏何れより別れしぞ承らんと申しける。南無三寶と思へども知らずと云はゞ悪しかりなんと。ム、扱は

私を。誠の左衛門にてなきと思ふ疑か。拙者が家の氏系圖存せぬ事や候べき。末永くゆるぐと御物語致しませんとぞ答へける。冠者何がな詞質にせんと思ひ。イヤ重ねては重ねて。冠者奴も云ひかゝつて聞かねば一分異なるものなり。是非語りともなくばどうぞ又。語らせ様もあるべきと。にがくしくぞ申しける。今は通る、方もなく然らば語つて聞かせ申さんと。まざぐしくはいひけれども夢にも知らぬ斯波の系圖。何處へ取付きいふべきやら。こは如何せんと思ひ亂れて居たりしが。此の上は力なし古の大將兵を。思ひ出すを幸ひに口へ出るま、嘘八百。云うてのけんと心を握る膝立て直し息つきし。左もありさうにぞ語りける。

もんさく系圖

總じて源氏もしなぐの。清和源氏。宇多源氏村上源氏嵯峨源氏。中にも斯波は清和源氏。歌源氏々々が四源氏御座る。中にも清和ぞ世に光る。フシ光源氏は敷島の歌道の傳授と聞えたる百人一首の巻頭。天智天皇十八代の帝。陽成院筑波嶺の。峰より落つる源の。頼光に胤腹一つの御弟。頼信の跡取頼義の總領。嘘でないよの愛宕白山八幡太郎。義家に五代の後胤上總之介義兼が末葉。兵庫頭坂田の公平には顔。眞赤いな他人にて。渡邊の綱こそは。フシ茨城。童子が片腕。只一太刀にうちわも内輪。フシ叔母筆ぞや。叔母の息子の競漕口源三位。頼政の小姓立猪俣太とは行合兄弟。近衛院の御宇かとよ鶴といひし獸の。帝を惱まし奉る頼政勅説。蒙つて。たんだ一矢にころくく。落つる處を猪俣太九の刀ぞ。地刺いたら島。島山の重忠も。フシ縁者つゞきの先祖にて。三浦の大介が痲氣筋。四代の末孫朝夷奈の三郎義秀は。音に聞えし大力。

會我の五郎時致が鎧の草摺むんずと取つて
曳いて見せんとふみしめて。蹈んばたか
つた股野の五郎。力損にて我等まで。いか
な殿御もしつかと。だきしめだけはあられ
の佐々木殿。土肥の二郎も從弟筋從弟程よ
う。フシ仁田の四郎。富士の御狩の功名は。
末代末世記録に載つた。猪武者の争ひに。
負腹立て、讒言いふ。梶原とは何でもなく
鎮西八郎爲朝の外戚腹。瓜の蔓に那須の與
一扇的より精兵の達者。弓の傳授の家を
とは是ぞ系圖の始めなる。フシそれより代
々に傳りて。楠多門兵衛正成が嫡子犬坊
丸。二男惡源太義平。三男山邊の赤人は古
今無雙の歌人にて公家にも。一門。在原の
業平の中將の。妾腹の孕ごもり妻もこもれ
り若草に。今日はな焼きそ。フシ武藏坊。辨
慶が七番目の末子。七つ道具のさいづち頭。
法然上人の一の御弟子と有難き。熊谷の二
郎直實に三代の一人娘。靜御前は血の道持
つづく。と見れば見る程好い男。日の暮れ

腰越より。追返されさせ給ひにし九郎太夫
の判官。源の義經の一の谷の鶴越。眞逆様
に。フシ落し子の末葉も茂る桃園や。清和源
氏のちやくちやく嫡流斯波尾張守家氏。左
近の太夫時氏其の子に宗氏其の子に武衛。
高經が三男斯波左衛門義將とは我等が事に
て御座んすと。口に任する系圖の卷胡散な
處をいひかすめ。息吐き次第に云ひければ
さても廣き御一家。鬘に過ぎたる智殿や三
國一ぢや掣に取り。フシすまいたとぞ謠ひ
ける。地權頭夫婦の人長物語に女の姿。顯
れては如何と思ひちと御休息候べし。我等
も勝手へ罷立つ。皆々はへと打ちつれて。オ
クリ座敷をへ立つてぞ入り給ふ。地小晒は只
一人さてもあぶなや氣づまりや。眞似をす
るさへ術なきによう殿達は彼のよにして。
生きて居さんす事ぢやまでと。獨語して身
を横に。フシ手枕してぞ休み居る。琵琶の姫
立歸りさし足して寢姿の。うしろに立つて
つづく。と見れば見る程好い男。日の暮れ
るまで待たれぬと。とんと抱付き臥し給へ
ばなう悲しやと起上る。袴の相引しつかと
取りこりや騒がしい如何ぞいの。暮るるを
待たぬ新枕御蔭も恥かしながら。御事故
に氣病して泳へ性なく落付かず。帯紐解い
て下さんせ寝て見もせいで嫌はんすかと。
じろりと見たる顔付は。フシほれて欲しそな
目許なり。小晒もたうわなく親達のいひつ
けには。御彼の子の氣色本復までは寢る事
無用とある上に。地ぬけがけしては一分立
たず是非に寢よなら寢もせうが。鞘と鞘と
で切合ふ様で。フシ齒切れがせまいと笑ひけ
る。しや堅い事はかり毒藥變じて藥となる。
袴なりとも解かしやんせと取付けば飛退き
て。阿、譯もない。此の袴の下には鬼が
栖んで。地いつかい口で嚙付きます。怖い
事ぢやとありければ姫さめふくと泣沈み。
つれもなきお心や男に立つる心中は。珍し
からぬ事ながらみづからが兄藤冠者氏連と。
伯父赤沼と心を合せ將軍義教公の御判を以

て。賈週文を致せし所を自ら御判を遂置き、

新手枕の引出物に参らせんと。兄伯父の敵

となり隠し置きたる心といひ。あんまり辛

き我が殿とステ恨み啣ちて歎かる。御

尤々々御判も請取り義教公へ奉り。御身の

思ひも晴させたいが肌を觸れて疑る事は。

凡夫の業には叶はぬ事。どうぞ抱付くばか

りでは、フシなるまいかと言ひければ。地

れほど寝るがいやなものよう聲入はなされ

たな。今ならずば今宵の中今宵ならずば明

日明後日。少將程通うても叶はぬ間はかな

はぬなり。よう覚えてやとかこつ目に。涙

を浮べて歸らる。オッリ心の内こそわりな

けれ。藤内二郎盛治は女房とは夢にも知

らず。左衛門殿聲入りの風聞あり赤沼一家

に縁を組み。心を許し給ふ事飛んで火に入

る御身の上。如何にしても氣遣はしと借着

扮装つ古川の。式臺に立ちかゝり當番に近

付き。斯波の左衛門が家來にて候。主人に

そと逢ひ申し度き事の候。御取次頼み存す

るといふ。地番の侍聞き届け幸ひ廣間にお

出なり。かうお通り御免あれと奥に入れば

上段に。器量ゆゝしき若侍茫然として坐

したりけり。我が女房の小晒に能くも似た

る男子かな。さもあれこれや斯波殿ならん

と額を疊に謹んで。別近頃憚り千萬ながら。

藤内太郎家治が兄弟なれば。お主同然の忠

義を重んじ奉る當代の習ひ親が子を誑れば

子は親に楯を突く。況んやこれは赤沼が一

族。殊に御小舅藤冠者は。君を討滅さん結

構と密々に承る。地御運盡きて不覺の事も

候は。色に溺るゝの嘲弄遁れ給はじ。と

つく御供申さん爲參候仕るとぞ申しける。

顔顔を上げねばそれとも知らず。ヤア誰な

ればちんぷんかん殊に此の左衛門を色に溺

るゝとは。地宿に残せし思ふ人の傳へ聞か

るも恥かし。先づ己れは何者ぞ罷立てと

ぞ仰せける。イヤ某は御家來藤内太郎が弟。

同じく二郎盛治と顔を上げればなう。藤内

殿が我が夫かと。走寄つて縋り付くを小腕

捻ちて取つて投げ。若君のおさし奉公と偽り。所こそあれ赤沼

一家剩へ女の身の。斯波殿と名乗つて月代

剃つて。其の態は唐天竺にも例を聞かず地

爪一つ髪一筋夫に任せし身體ならずや。察

する處敵に頼まれ斯波殿を。賺し密する計

略か但しは不義か。逆も助けず白狀せよと

フシせて聲さへふるひけり。地女房動せず

ア、コレ聲が高い。不審も腹も立つは道

理。さりながら不義をする妾でもなし敵に

與せん様もなし。爰の娘御左衛門様を戀病

の心ゆかしの物にとて。だましてかくはな

した事。それに就いて。琵琶の姫大將の御

判を兄の持つたを奪取り。地床入りしたら

ばくれうといふさまぐ思案して見れども。

千日千夜案じても女子同士の床入は。文殊

の智慧にも能はぬ事腹を立てずと御判を取

る。分別したが好いわいのコレせく事では

ないぞやと。事をたゞして云ひければ盛治

聞いて。それは案の外の事出来いたく。

まづ其の御判が取りたいがどうしたものであらうといふ。これ重疊の思案がある。今宵も姫の忍ばれん此方様私と入替り。暗がりに姫と寝て賺して御判を取り給へ。ハテそれがどうなるものぞ餘の分別をせいといへば。地主、いはれぬ斟酌わしさに慾を離るれば。お主の爲ぢやないかいの。いやいや終には左衛門様御夫婦の姫君に。疵がついては後難なり然らば某閨に待受け姫君忍び給はん時仔細を語り。連れて立退き参らせん時には御判も取戻し。姫君も御夫婦と本望を遂げさせ給ふのみか。我々が忠義も立つ好き折柄に來合せたり。此方へ任せ案内せよと盛治は上段の。帳臺の戸を差廻し臥したる體にてもてなせば。女房は植込の數寄屋に隠れ首尾合せ。一所に連れて立退かんとオクリ手筈をへ取つて別るれば。フシ早暮六つの。時計の聲一間々々の大蠟燭星の降りし如くなり。牒合せし藤冠者亦召判官藤内三郎。郎等には走井久八根地大藏。

息をも立てず拔足して帳臺を押取りまき。鞠垣の大網をそろりくと引延し。四方に張つて包みしは。フシ通れがたなき手段なり。地すまし顔にうなづきあひ面々が懐中より。大釘鐵槌取出し襖遣戸に手を揃へ。一度に打つて打付けたり。藤内二郎南無三寶と此處よ彼處と明くれども。釘付けの戸の明かばこそ障子を破り差覗けば。大網かけと軍兵どもも兵具提げ圍んだり。天へや飛ばん地へや潜らん。六神通の阿羅漢も。フシ遁れつべうはなかりけり。障子の内には大音上げ涙を流いて。詞に偽りなし。七人の子は生すとも女に心許すなとは。今身の上知られたり敵は敵と思ふべきが。おのれ女奴此のまゝにて死するとも。大天狗となつて思ひ知らせんと。戸障子叩き踏みならし敵の奴等よつく聞け。昔が今に至るまで君を弑し父をなみする族はあれど。主と掣とを討取つて世に立ちし例やある。汝知らずや長用の庄司は。主君義朝掣の鎌田を害し其の日に其の身も討たれたり。地因果は下れる車の如し報はん程を思ひ知れ。せめて冠者奴か判官奴か一人討取り羅兵の。五騎も十騎も左右の脇に掻込うで。思ふ様に締殺し心變りし女奴を。蹴殺いて死なんずものをエ、く、く、無念なり口惜し、と。踏んだる板敷どう。く、く、く、はらりはと踏鳴し血の涙をはら、く、く、はらりはらりと襖を切裂き牙を噛み。跳り上つて怒りをなす。フシ無念なりける有様なり。障子の外には女といふを姫の事と心得て。ア愚なり左衛門。敵の娘兄弟とは知りながら。悠々と掣入して女を恨むる不覺さよ。此の通りにて乾殺しに逢ひ餓鬼道に墮ちんより。一思ひに腹切つて修羅道に墮ちよかしと。一度にどつと打笑ひ鯨波の聲をぞ上けたりける。權頭夫婦姫君諸共走り出で。ヤア物に狂ふか悪人奴。仁義ある斯波殿と縁を組みて忠を盡し。身を立てん心はなく謀反人に與し。賢人の大事の掣をも討たん

とは天魔の障碍かあさましと。制し給へばにしたり。硯箱を味噌にする古菟籠を忍に。は我が事よ敵に勝劣なけれども。差當つて

ヤア聞きともなし。地大義には親を殺すそ目の前で屋賃にせし神變自在の女なるぞ。は第三郎奴首捻切らんと飛んでかゝる。三

れ塌めよといふ所へ。庭の一本の蔭よりもぬ痺はしさよ。サア此の上は案じもなし。彼方へ追立て追ひまくり三郎危く見えける

ヲ、暫く暫く斯波左衛門是にありと。夕暗照す黄金作り五尺餘りを指貫き。搖ぎ出天に二つの日なし地に二人の殿御なし。地

でたる有様は鷗群れ居る潮干瀉。蘆分け夫の爲に捨てん命塵灰芥吹けば散る。煽けば飛ぶ高の知れた浮世の中。詞たとへおの

鶴ののさくくと、フシ物に恐れぬ威勢なり。れら鬼神にてもあらばこそ。地斬らば切ら

藤冠者驚きて。今迄爰に聲しつるが何處ねん。命限り腕限り三つ四つの男首。詞此

より逃出でけん。それ討取れと。呼ばはんす突かば突かうず飛ば、飛ばん跳ねば跳

ればハ、ア愚かく。蟹は甲に似せて穴ねん。命限り腕限り三つ四つの男首。詞此

を掘るとは汝等が事よ。天下の管領承つての一つの女首換へば換へ徳サア来いと。耶をとつて伏せ。高手小手に縛め寄せ来る

六十餘州の政道を司る。斯波の左衛門義將身も軽々と早速を踏み目の中鋭く身は凛々

身は一つなれども。命に代り名に代り幾人しく。勇みかゝれる有様は昔の巴山吹が。フ

にならうとまゝ。これき藤内三郎。なんとシ生れ變りと謂つべし。地ヤア口の過ぎた

此の左衛門は其の方が嫂の。小晒といふる女めかな。あれ討留めよと下知すれば。勝手次第は拙者が正月の。料理初めの初

女によう似たとは思はぬか。ヲ、似たも道理権頭打物抜き母も姫も長刀構へ。主とい

理誠は藤内二郎盛治が妻。小晒といふ女房ひ掣といひ親に敵對ふ大悪人。除すまじと

なるわうつそりども。女と思ひ怪我するな入違へ暫し支へて三重へ斬結ぶ。地其の際に

並や通塗の女でない。地浪人のうき雜儀針盛治は疊を上げて板敷を。やすくと切破

一本の力にて。夏の物を冬にしつ鏡立を米り大章になつて現れ出で。藤内二郎と

三役繪がつく徳つく色がつく。人思ひつ

く知行つく民も。つくく筑紫の果も東も
靡く管領職。武家繁昌の御代に逢ふ。此の
正月こそ目出度けれ。

源義教公道行 下之卷

歌文武の花も榮えた初花咲いた見さいな。
藤内四郎殿ナ。太鼓打の。役で。代々の太
鼓を。あそこらもとに置かせて。金の撥を
手に持ち。てれつくにはつツてんく。て
れつくにはつツてんでん。とうからつとん
と打惚れたなるかならぬか。戀の中の町。
なつかのく中の町を通りたうはないが。
七草たゝいててつへい若水。裸花掣百貫。
くわんくくわんとも鳴るは夜明の。鐘は
つくくつらいか。つツてん。地天の道フシ
せばからず。立つ春は鶯鳴かぬ離れ島。
雪の深谷の奥までも。知ればや知召された
る。スエテ御身の上に如何なれば。御運も今
は薄霞。花の曇もたなくに。袂は露にゆ
ふべの色。赤沼父子が逆心を防ぐ力もつき
弓の。月の都を。月もろともにオクリをちか

た。人とさすらふる羅綾の袴。錦繡の。重
ね引換へいつの間に。鞆衣と綻びて。フ
シオクリほつれ。出でさせ。給ひける。フシ従
ひ仕ふる。者とては。御側近き旅衣。狩場
になれぬ若鷹の鳥立も知らぬ若草や。二番
生えなる。フシ若侍。地大夫六角左近太則
冬算氏公の白旗を。守袋にまもりとて疊み
込めてぞ持ちにける。ワキ山名伊織之介氏
廣が。肱にかけたる秋紗には代々に傳はる
軍配團扇。木夫昔を匂ふ梅の鞭。畠山小將監
高顯が。袋に收め腰に指す。ワキ同じく郎
等藤内四郎光治。二人彼等もせめて攻太鼓勝
色見せて又何時か。都に歸り花軍開かん。
御代の。フシ關路の鳥も。此の曉を今暫し。
忍べや我も忍ぶぞと。地門出の雁に驚きて。
笠打掩ふ人々の。フシ世の成る末ぞ痛はしき。
ハルフシ思ふに違ふ。あらましに。昨日と過
ぎつ明日は又。いさや白木の弓の弦。フシ思
ひきれども思ほえず。願らるゝ九重の。残
んの雪のほのくくと。フシ花に。明け行く比
叡の嶽。スエテ霞にこめて鞍馬山。鞍置き馬
の數々をオクリ繋がせ。曳かせ歩ませて折に
ふれたる乗心。フシわが北山の御所櫻。フシ
春の眺めと。櫻蔭歌咲いた櫻になぜ駒つな
ぐヨノ。勇めば駒が。駒が勇めば地天にも
上る。フシ雲雀毛や。夏は梢も青の駒。祭に
加茂の瓦毛や紅葉にかよふ小牡鹿の。鹿毛
も冴えたる月毛の駒の。駒の銜さへく
くと。手綱はいくりく栗毛に。乗つた
馬上はよしや蘆毛に。雪の四つ白覆輪や。
フシ金覆輪。今は梨子地の鞍籠馬はあれども
此の身には。徒歩路越えゆく木幡山弓手に。
みつの行く先は。地山梶原と聞くからは。
世に隠らふる我々が。此の身包むに頼もし
く。フシ明けずもあれな淀川の。岸にかけた
る白浪を花の網代と朝ほらけ。鶯の鳥驚飛
んでハツミ天に至れば。魚。淵に躍る教へも。
上下の。スエテ道明らけき鳩の峰。正八幡の
鎮座なる。地我が氏の神軍神武運を守りた
び給へと。江戸頭を傾ふけ給ひければ。お

のく遙に禮拜し。君が行方を祈念あるヲシ御有。様こそ殊勝な。れヲ見渡せば。

地山の名の。朝日に氷解けわたり水や烟を横の島。宇治の里の子打群れて。歌萌ゆるるぐ摘む若菜摘む芽花杉菜にさいたづま。妻は誰が妻老いぬれば。蔭の姑。く。水

無い川で船こがば其方は目籠で水を汲め。蔭の姑。蔭の姑。あの松山の松葉をよめや。嫁菜蒲公英。ヲシ土筆。蕪菜摘みて

童の。相撲取草立つ方に。勝てや勝てく。かちどきの聲高無雙武士の。槽にかけて播磨投。ヲシあぐる團扇や。ヲシ扇の芝に。はや

三番の勝相撲。名乗りて過ぐる杜鵑待たぬに春を。漏れ出でて。地弓馬の道も魁げんと。張りわたす長池や水草かきわけ鳴く蛙。

かはづ軍の勝負に。御身の上の占問へば。水の源淀みなく濁り。なき世に泉川しばしが程の泡沫に。沈まば沈め頼みある薺の。

原にぞ。三重。着き給ふ。ヲシさて其後に。地島山小將監進み出で。

某召具し候は藤内四郎光治と申す郎等。太鼓の妙を得戰場の駈引。御陣の押太鼓萬里を響かす名人故。地則ち御代代の太鼓を預け召連れ候。斯波の左衛門が家臣藤内太郎が弟にて候へば。此の者を御使として斯波が方へ内通し。一先づ御頼み然るべしと

申し上ぐる。地義教公や、涙ぐみ給ひ。我もさこそは思へども斯波が諫を用ひず。今かかる身となつたれば今生にて左衛門に。いかでか面を合はされん。仁義ある忠臣に見捨てらるゝも義教が。スエテ運の極めとばかりにて御。涙にぞ咽ばるゝ。地かゝる處に十八九なる若者。編笠脱いで御前に畏り頭を地に着け申すやう。地某は御近習に召

使はれし一色大炊之介にて御座候。御壁書を背き不義の科高眼を掠め。女を相具し駈落重罪遁るゝ方なく候へども。全く色に耽り御成敗を恐るゝにも候はず。もと我等は一色が子にて候はず。元來父母もなき捨子とやらにて候ひしを。地養父一色兵衛拾

ひ取り御目見え仰付けられ。總領に立つべき處に段々實子出生いたし。養父兵衛尉世を去り母にて候者。若年の弟を總領と申し上げ年嵩の某を。末子と沙汰し式日の御禮も俄に末子の座に列り。御供に候六角島山山名を始め。肩を並べし諸朋輩に。地面を向けんも面目なく。所詮一色が家を出で誠の親の所縁を尋ね。此の面目を雪がんと存じ候折柄。心の外に御法式を背き御所を立退き候。慈悲は上より御免を蒙り。御馬の前にて討死仕り候は。生前の思ひ出とスエテ涙を流し申しける。地大將御立腹まし。く。

地など以前首を斬つて棄つべかつしに。入道奴が助け落したれば己れは入道が。大恩を受けし者を召使はん様はなし。誠あらば立歸り赤沼入道父子の中。首取つて來れ其の時は勸氣を教し召使はんす。地溜り立て

と御説ある大炊之介承り。有難き上意赤沼父子が首取つて。御憤を安んじ奉らん如

何に朋輩達。若し仕損じて討死すとも。敵

に半死半生の深手を負はせて置くべきか。

御勤氣御免の御執成（おんしんきごめんのおんしつなり）。頼み申すとばかりに

て御前を立去りし（ごまへをたちさりし）。フシ彌猛心（やしやまげこころ）ぞ頼もしき。

地大將彼が後姿（ぢだいしやうがごしすがた）を遙に見遣り給ひ。如何

に方々彼奴が詞は心得がたし。大炊之介が

瘦腕にて赤沼父子を討たんとは。誠に蠅螂

が芥なれば叶ふまじきと歎かんこそ。誠の

心なるべきにたやすく討つて參らんと。輕

々しく立つたるは思へば彼奴は入道が。恩

を送らん爲義教が有様を窺ふと覺えたり。

おつかけ討つて来るべしとくくと宣へば

。血氣盛んの若者とも逸るばかりに思案も

なく。討取つて御門出の一番手を祝はんと。

早速を踏んで三人は藤内四郎相具して。も

みにもうでぞ追駈ける。フシ御運のなせる

處なり。地旅人の休らふ體にもてなし。傍

に寄り給へば何處よりか來りけん。矢一つ

來つて左の袂に立つたりけり。こは如何に

とかなぐり給へど堪らばこそ。猶亂れ來る

矢を渡がんと笠を以て受け給へば。刈殘し

たる村薄（むらうす）。フシ枯野に立てる如くなり。地今

は叶はず是までと此處の木蔭彼處の草村。

隠れ顯れ逃れんと。竹む處に赤沼熊橋弓箭

の武者百騎ばかりが。一面に矢襖（やぶす）つくつて

どつと寄せ。ヤア義教都よりつけ來るをそ

れと知らざる愚さよ。速に腹を切れ異議に

及ばば地なぶり殺しにせんすると。鐵をな

らべし其の勢ひ遁れつべうは無き處に。

藤内四郎取つて返し。矢面に駈塞（かきさい）つて。ヤ

アこりやなまこび過ぎたる奴輩（やつら）かな。畠山

が郎等づでん天下に隠れなき。太鼓打の藤

内四郎定めて音にも聞きつらん。太鼓も打

つたり敵も討つたり。物臭い赤沼に胸が悪

うて頭も討つ。地太刀も刀も入らばこそ撥

二本が干將莫耶（かんしやうもくや）。一曲所望かサア來いと四

邊を睨んで立つたりけり。相手になつて犬

死すな遠矢に射取れと。差詰め引詰め雨篠

と飛び來る矢を。樂車太鼓の曲撥見よと。

撥押取つて切拂ふは前代未聞の三重拍子

なり。フシ矢種盡くれば。地敵の勢太刀拔連

れて討つてかゝる。大將も太刀さしかざし

支へ給ふ其の際に藤内太鼓を轉（まわ）ばせ寄せて

天も響けどう。くくくと打鳴らす其の

聲に。すは事こそと三人は我も我もと引返

し。大勢に割つて入り斬立て確立て追散ら

すは。フシ潔かりし働きなり。地熊橋犬二

郎滿景取つて返し藤内に討つて蒐る。しや

しれもの奴太鼓の撥の鹽梅見よと。目とも

鼻ともいはせばこそ。無二無三に叩きつけ

太刀打落いて小股をかき。俯伏に取つて伏

せ。フシやがて繩をぞかけたりける。地程な

く三人立歸り御事初の御吉左右。猶も目出

度き驗には只今あれにて承れば。赤沼入道

吉野山の古城に立籠り候を。斯波細川が攻

寄するとの風聞。兩將が陣へ御入りあり。

逆臣滅す。謀時刻を移すべからずと。言上

すれば御大將けにもと同じ給ひける。藤内

四郎は犬二郎が背中に太鼓を括り付け。御

出陣の武者揃へ味方を集むる觸太鼓の。祕

曲を打つて祝はんと撥輕々と打鳴らし。聲

張上げて觸れにける。明日より吉野の山にて大合戦寄手の勢は三萬續き。敵役は赤沼入道御望みの方々。明日はとうからからくく。とんくからからどんがらが。つツてん天の時到り。地の利に合へる名將の出陣こそは、三三〇〇〇男々しけれ。ノシさる程に。斯波の左衛門義將は大將軍の御出に。面目開く花櫻吉野に籠る大敵を、血汐になれと赤沼が大手の木戸に向はる。搦手は細川勝秀三萬騎を引率し。貝を吹き太鼓を鳴らし鯨波の聲をぞ上げたりける。副軍大將竹東際に駒を立て清和天皇の後胤、足利の類葉斯波左衛門尉源義將。寄せ來る意趣は赤沼入道父子謀逆を構へ。帝都を騒がし武將を弑し。四海を覆ふさんとする罪科、讎なし。誅戮せしむべき旨承つて發向す。勅命といひ武命といひ天道いかでか免れん。速に腹切て親子首を渡せややつと呼ばはつて。地しづくと乗入れしは、フシゆゝしかりける武者振なり。入道門の矢切に立つて。大將を滅し國家を望むは弓矢取る身の定まる法。和漢其の例を知らず忠孝に事寄せ。位牌知行に膝を屈むる臆病者。入道一家を討たんとは鷲の巢を鼠が狙ふに異らず。誰かある討つて出で追散らせと。采押取つて下知すれば。城にも関をどつと揚げ大手の木戸口押開き。切つて出づれば寄手の大勢人違ひ入亂れ揉みにもうで三三〇〇〇戦ひける。フシかゝる處に。地金の御嶽の方よりも若武者一騎。卯花織の鎧着て大手の木戸に突立ち大音上げて。城内へ申すべきの事候。我こそ入道殿に一命を救はれ參らせし。義教の奥小姓一色大炊之介久常。御高恩忘れ難く命の親の御先途に。鏑一本のお役にもとお味方に參つたり。門を開き城内へ入れてたべとぞ呼ばはつたり。斯くと聞くより新判官堀の上に現れ出で。ヤア表裏者の恩知らず。汝不義の科によつて害せられんずる處に。父入道が情を以て命を助け落せしに。其の大恩を振捨てて一大事をなす。藤内には語りしぞ。大猫の畜類も食を與ふる恩を知る。地蟲同然の奴ばらを此の赤沼が味方にせんずる様はなし。とつく歸れと云ひすて、城の内へぞ入りける。大炊之介も詮方なく寄手の陣を見渡せば。藤内兄弟三人陣頭に控へたり。大炊之介きつと見て珍しや藤内太郎。定めて沙汰にも聞き給はん。某御勳氣御免の願ひ申し上けたる處に。大將軍の仰には赤沼父子が中首取つて來らば。其の時御免あらんとの御説に付き。味方と偽り城に入り讎り討たん心入れ。門外までは來れども敵心を許さねば力なし。方々ひとへに頼み入る斯波殿へも様子を語り。御執成にて御免あり心すし哀れと思ひ。引組んで討死送けたい心底をとステテ涙を流して頼みける。地調太郎聲を荒らけ情知らぬに似たれども。大事の攻口小事に拘る暇なし。軍初めの味方に對し涙の體は不吉なり。地餘人を頼まば頼まれよと

フシ愛想なげにぞあしらひける。地はつとばかりに大炊之介。扱はふつつと叶はぬかと。スエテどうと座を組み歎きしが。敵も味方も聞いてたべ某程世にあぢきなき者はなし。地誠の親は見す知らず捨子となつて拾はれし。名字の親の一世殿には死別れ。主君には勳氣を受け朋輩には疎まる。此の身の前世は何者が生れ替りて此の身ぞやと。諸軍勢の見る目とも恥ぢず。歎くぞ哀れなる。地工、思ひ極めたり軍をすとも侮つて。好

き敵は向ふまじ雑兵の五騎十騎。討つとも何の益あらん兩陣の真中にて。腹掻破り生々の業煩惱を晴さんと。腰刀するりと抜き此の刀こそ生みの親より譲りの刀。是を添へて捨てられしと養ひ親の物語。二度指すべき鞘にてなし。共に異途の供せよと。鞘の真中二つにさつと切割つたり。不思議や鞘を二重に鑿り父の筆とおほしくて。一通の證文あり諸人不思議の思ひをなし。鳴りを靜めて聞きければ高らかにこそ讀みたり

けれ。五番目の男子に書置く一通の事抑我等が氏は藤原生國は河内の國。依つて家名を藤内と呼ぶ久しく浪人に沈淪して。五人の男子を儲く一藝に名ある者は。用ひられずといふ事なしといふ本文を忘れず。藤内太郎より二郎三郎四郎まで笛鼓を習はしむ。汝は襦袢にて母に後れ父亦今死に臨む。孤兒とならんいとほしさ路頭に棄て、養育

の。又餘の親を待つ事も誠の親の情なり。共に孝行忘る可からず藤内五郎忠治へ。慈父藤内太夫實治判と。讀みも終らず太郎二郎四郎も立寄り。見れば父の手跡なり在りしとばかりに見す知らぬ。乙の五郎なりけるかや兄々達か懐しやと。兄弟ひと抱きつき。慕ひ歎くぞ道理なる。城の内に聲々に斯くとも知らば誘き入れ。とつて討つて棄つべきものを。あれ餘すなと云ふ程こそあれ。我もく木戸押開き鎗先揃へて支へたり。何處よりか來りけん藤内三郎

將聞いてたべ。先日古川が館にて。兄の二郎に搦め捕られし藤内三郎武治なり。つれなき兄奴が生けもせず殺しもせず。遺放しの放し劍近頃無念千萬なり。繩をといて給はれかし兄二郎奴が首取つて。此の無念を晴らしたし如何にノと呼ばはれば。城に籠る藤冠者任せて置けと飛んで出で。ヤア三郎か珍しや。大事の味方一人拵めき

せ。一旦の出來心兄に背きし後悔さに。誑つたるぞたわけ者。すぐに此の繩頂けと三寸繩に括り上げ。兄弟の中直り土産にすると廣言して。味方の陣へ押立て行く。フシ心地よかりし勤なり。弟五郎入替り今迄は大炊之介今日よりは藤内五郎。四人の兄は親のしつけし亂舞藝。我等は自身の手覺にて棒を一手覺えたり。我と思はん者あらば某が棒先に。中つて見よと呼ばはつて白銀にて筋金入りし。櫛の棍棒搔込うて進る出づ

れば四人の兄弟。地我々が一藝も揃へて軍の目を覺さん。棒に合せて囃せや鼓吹けや横笛。打てや太鼓討つたり敵と戯れて。一聲を奏すればこは花々しの者どもや。討取つて功名せよと走井久七久八・羽根田頓藏根地大藏。栗生熊藏石坂九郎得物くを提けて。打つてかゝれば藤内五郎棒の祕術の水車。横車腰車片手輪違ひ變輪違ひ。一文字十文字拂ひ落し掛落し。百手を千手と術を碎き。數多の敵に駈向ふ目覺しかりける

三重、働なり。地胸板胸骨眉間眞甲打割られ。弓手馬手へぞ伏しにけり時分は好きぞ乗取れと。搦手より細川勝秀城中へ亂れ入り。堀際堀際追詰めく。一騎も残さず討留めしが赤沼親子を見失ひ。此處よ彼處と尋ぬる處に。地中川が亡魂は花の吹雪の雪女。一念の鬼女となつてあら恨めしや如何に赤沼。たとへいづくに隠るゝとも助けはやらじ吉野山。花を尋ねて山廻り最期の寒風また此處に。冴返りたる雪氣の雲の雪を誘ひて山廻り。めぐりくして輪廻の恨み。思ひ知れやと入道親子を引立てく。來れくと大將の御前に引据ゑ。猶行末は源氏の白旗白雪の。守神ぞと木綿四手のフシ雪を。散らして失せてけり。地大將御喜悅淺からず二人が頭を斬りかけさせ。勝鬨三度三々九度斯波細川に御盃。藤内五人に五箇國の御加増御褒美だんくに。樂車打つ

右之本令吟覽頌句音節墨譜
等不殘毫厘令加筆候可有開
版者也

竹本筑後掾
本竹
教博

重而予以著述之本令校合候
畢全可爲正本者歟

近松門左衛門
山本九右衛門
山本九右衛門

大阪高麗橋堂丁目
正本屋
山本九右衛門
山本九右衛門